BINGO OPEN インターンシップの教育効果について

―実習前後の社会人基礎力診断テストを基にした一考察―

前田 吉広*　　向井 勝也**

About the Educational Effect of BINGO OPEN Internship

Yoshihiro MAEDA*　　Katsuya MUKAI**

ABSTRACT

The purpose of this research is to organize information that will be the basis for thinking about the future of internships. Before and after the internship, a diagnostic test for the fundamental skills of working adults was conducted, and changes in the diagnostic results were considered from three perspectives (student grade, faculty, internship type). As a result, we were able to find hints for improving internships from each of the three perspectives. In particular, we were able to find a big difference between online and face-to-face programs, in the comparison of internship types.

キーワード：インターンシップ、社会人基礎力、キャリア教育、評価

1. はじめに

福山大学では、2012 年度に文部科学省の補助金「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」[1] の採択を受け、これまで各学部・学科単位で取り組んできたインターンシップの取り組みを全学的にとりまとめ、専門のインターンシップ運営組織「自分未来創造室」を中心に広く社会・地域に開かれたインターンシップを推進すべく、「BINGO OPEN インターンシップ」と名称を改めて運営をおこなってきた。しかし、2020 年度のインターンシップにおいては、これまで積み重ねてきた BINGO OPEN インターンシップの運営ノウハウが通用しない 1 年となった。新型コロナウィルスの世界的な蔓延により、感染リスクの高い対面でのインターンシップが見直され、オンラインで代替する試みが各地でおこなわれた。BINGO OPEN インターンシップの受入企業も同様に、従来の対面型プログラムをオンラインに切り替えて実施する企業が増加した。大学側も、備後地域における感染状況を鑑みて、これまで対面で実施してきた合同企業説明会や事前・事後研修をオンラインで実施する判断を下し、講義のライブ配信や LMS（Learning Management System）を活用した情報提供に切り替えた。インターンシップに参加した学生達も、緊急事態宣言の発令によって、予定していたインターンシッププログラムが急遽オンラインに変更となるなど、状況の変化に対して柔軟に対応する力が求められた。このように、インターンシップに関わる全ての組織・人にとって、試行錯誤の年となったのが 2020 年度のインターンシップである。それから 1 年が過ぎ、2021 年度を迎えた今、インターンシップは新たな局面を迎えつつある。それは、感染対策としてのオンライン化ではなく、インターンシップに参加する学生の目的に応じたインターンシッププログラムを提供する上での選択肢としてのオンライン化である。実際、この 2 年間で大学の授業方法（対面授業、同時配信授業、オンデマンド授業、ハイフレッ

*大学教育センター講師　　**大学教育センター特命講師

クス型授業など）に対するニーズも多様化しており、感染対策とは関係なく、オンライン授業の学習効果やメリット等を望む声も数多く存在する。インターンシップも授業と同様、学生の参加目的や特性に応じた手法・プログラムを自由に選択できるように検討する必要があるのではないだろうか。また、インターンシップの教育効果に関する研究は、近年数多くの取り組みが報告されている。初見ら（2021）[2]は、近年の多様なインターンシップの経験とその効果について、学生側の個人要因（理系・文系の違いなど）に注目した考察を行っている。インターンシップと社会人基礎力の変化における関係性を明らかにする試みも増えてきている（河村ら（2021）[3]、岡本ら（2020）[4]）。本研究では、このような近年のインターンシップの教育的効果に対する関心の高まりにも応え、一大学における事例ではあるが、社会人基礎力診断テストの事前・事後比較によって今後の「BINGO OPEN インターンシップ」のあり方を導き出すための基盤となる情報整理をおこなう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学生の成長につながる「BINGO OPEN インターンシップ」の今後のあり方を模索するための基盤となる情報を整理することである。この目的を満たすべく、本研究では以下の２つの視点から 2021 年度の BINGO OPEN インターンシップに関する考察をおこなった。1 つ目は、インターンシップに参加した学生の社会人基礎力診断結果を基に、３つの軸（①学年、②学部、③インターンシップ類型）で学生を分類し、それぞれにおいてインターンシップ前後で 3 つの能力、12 の能力要素の変化にどのような違いが見られたかについて調査・考察をおこなった。２つ目は、今年度初めての取り組みとなる「キャリアカウンセリング」の有効性について、カウンセリング後に提出が求められるアンケートの結果をもとに調査・考察をおこなった。前者の調査結果は、学生の特性やニーズに合ったインターンシッププログラムの提案や企業とのマッチング率向上に役立つことが期待され、キャリアカウンセリングの有効性調査については、インターンシップを通じた学生の学びの深化に大きく寄与することが期待される。本論では、この２つの調査・考察のうち、前者についての報告をおこなう。※後者の調査・考察は「インターンシップを通じた成長評価と支援」を参照

3. 研究の方法

3-1. 調査概要

2021 年度の BINGO OPEN インターンシップ参加学生全員を対象に、事前研修実施前と事後研修実施後の 2 回、社会人基礎力診断テストを実施した（図 1）。

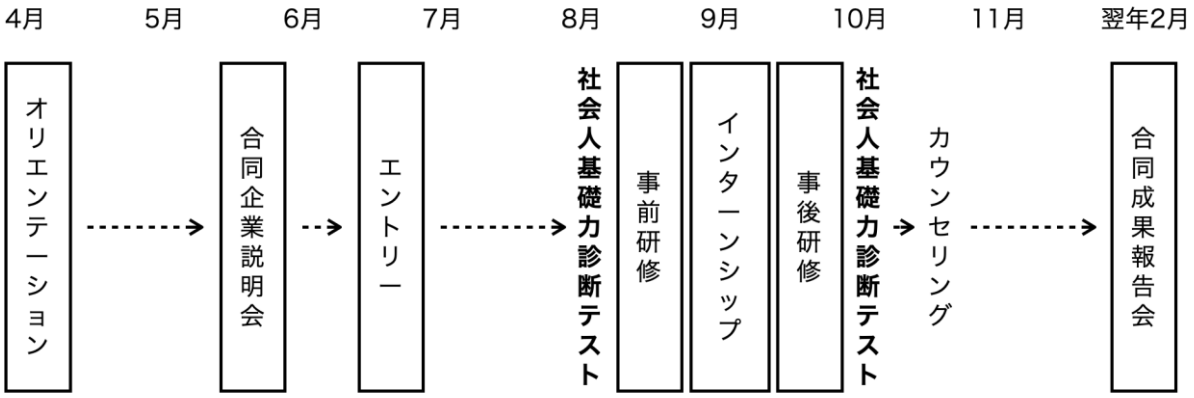


図 1. 2021 年度 BINGO OPEN インターンシップの年間スケジュール

社会人基礎力診断テストはオンラインで回答できる仕様であり、学生はスマートフォンから回答が可能である。全ての設問に答えると、経済産業省が提唱する社会人基礎力（３つの能力、12 の能力要素）[5]に沿って、学生の推定能力値が算出される。この推定能力値のインターンシップ事前・事後の変化を、インターンシップを通じた学生の成長を表すデータとして捉え、前述の３つの軸を用いた比較・考察をおこなった。

3-2. 調査対象者

2021 年度の BINGO OPEN インターンシップ参加学生の合計は 141 名で、そのうち、夏期のインターンシップに参加し、社会人基礎力診断テストを事前・事後の両方とも受診した計 71 名（50.4%）を調査対象者とした。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、夏期に予定していたインターンシップが 12 月下旬に延期となった学生は対象外とした。調査対象学生の内訳は表 1 の通りである。

表 1. 調査対象学生（71 名）の分類

①学年（3 グループ）

	1 年生	2 年生	3 年生
人数	3 名	12 名	56 名

②学部（4 グループ）

	人間文化学部	経済学部	工学部	生命工学部
人数	13 名	34 名	8 名	16 名

③インターンシップ類型（3 グループ）

	対面型	オンライン型	混合型
人数	13 名	26 名	32 名

3-3. 診断テストの内容

2021 年度の BINGO OPEN インターンシップで使用した社会人基礎力診断テストは、キャリア教育・就活支援サービスを提供する株式会社ジェイ・オー・アイ※が独自に開発したものを使用した。

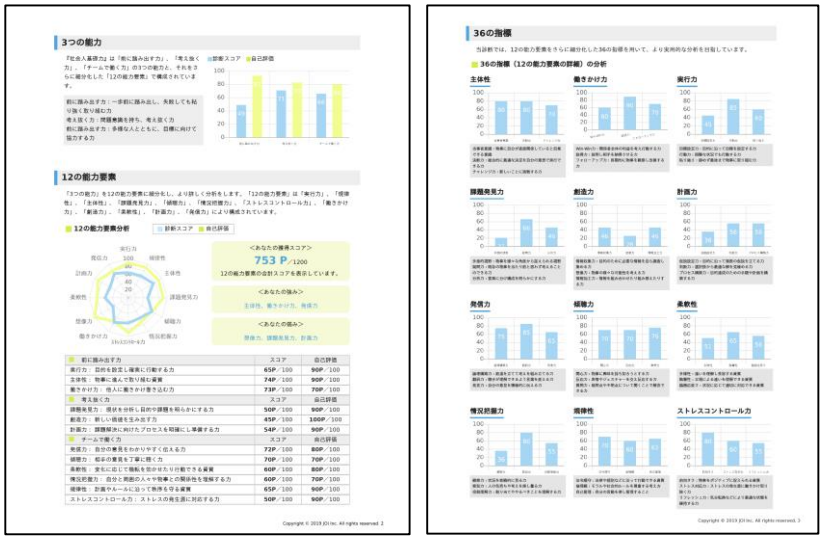


図 2. 社会人基礎力診断結果の一部（イメージ）

この診断テストは、受診者の回答態度によって推定能力値が調整されるアルゴリズムが組み込まれており、自己評価結果と診断結果が別々に表示されるため、意図的に数値を変化させることが難しい。診断結果には、経済産業省が提唱する社会人基礎力（3 つの能力、12 の能力要素）に加え、12 の能力要素を細分化した 36 の指標や、診断結果の能力に基づく適職の提案など、考察を深める独自の工夫が加えられている。診断結果は各項目 100 を最大値として表現されるうえに、グラフやチャートでも可視化され、学生は自分の強み・弱みを感覚的にも把握することができる。また、診断結果を PDF 出力できるので、インターネットにアクセスする必要なく、診断結果を保存・閲覧できる（図 2）。

3-4. 診断テストの受診方法

社会人基礎力診断テストの実施にあたっては、福山大学が全学で使用している LMS（Learning Management System）の manaba に専用の説明ページを作成して、インターンシップ参加学生に周知をおこなった。診断テストは一般的な Web ブラウザからアクセスできるタイプのため、パソコンはもちろんスマートフォンでの診断も可能である。診断テストは全 45 問の設問で構成されており、学生は 4 つの選択肢から自身の考え・価値観に合った選択肢を 1 つ選ぶようになっている（図 3）。

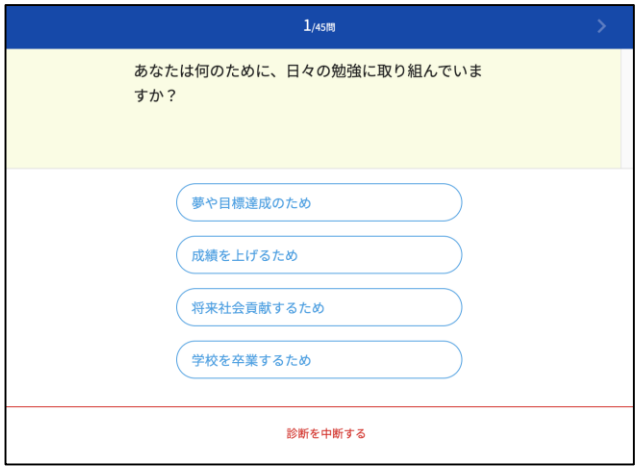


図 3. 社会人基礎力診断テストの設問・回答画面（例）

学生は事前研修の実施前約 3 週間（2021 年 7 月 12 日～7 月 30 日）に 1 回目の診断テストを実施し、インターンシップに参加した後、事後研修の実施後約 1 週間（2021 年 9 月 18 日～9 月 26 日）に 2 回目を受診するよう求められた。

4. 調査結果と考察

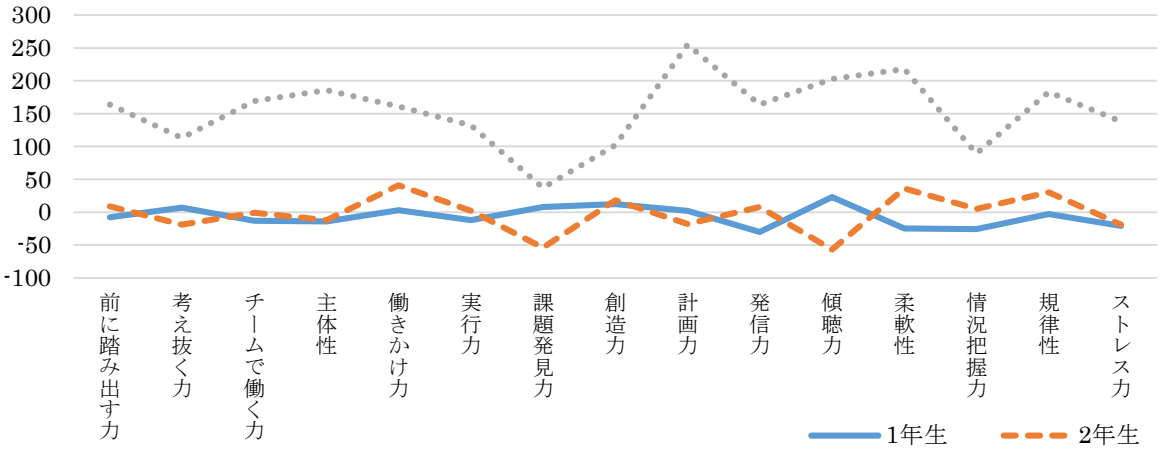
事前と事後の診断結果の変化を、前述の 3 つの軸（①学年、②学部、③インターンシップ類型）で分類し、比較と考察をおこなった。今回の調査で比較した情報は、社会人基礎力（3 つの能力、12 の能力要素）の 15 項目の能力数値の積算値と、インターンシップ後に能力数値が増えた人数から減った人数を差し引いた人数の差である。人数の差を比較対象に加えた理由は、分類軸による人数の偏りが能力数値の積算値に大きく影響を与える可能性が考えられるためである。

4-1. ①学年別

インターンシップ参加学生 71 名を学年別（3 グループ）に分類し、それぞれにおける診断結果の変化を整理したものが次のグラフ・表である（表 2, 3）。マイナスを表す項目数が学年の上昇につれて少

なくなっていることから、社会人基礎力の成長において学生の参加年次が影響を与えている可能性が考えられる。特に 3 年生のプラス変化が 1, 2 年生と比べて顕著であることから、近い将来の就職活動を見据えた参加目的や意識、大学生活を通じて身につけてきた知識・スキルや経験などがインターンシップで活用でき、1, 2 年生の数値との差として明確に表れたと考えることもできる。インターンシップ前後で特にプラスの変化があった項目としては、3 年生で「計画力（255）、柔軟性（218）、傾聴力（203）」、2 年生「働きかけ力（41）、柔軟性（36）、規律性（30）」、1 年生「傾聴力（23）、創造力（12）、課題発見力（8）」が挙げられ、全体としては「チームで働く力」に含まれる能力要素である「傾聴力、柔軟性、規律性」の向上が、他の能力要素の向上と比較して高く表れた。一方で、マイナス変化もしくは低成長の項目として目立ったのが「課題発見力」である。特に 2, 3 年生においては、マイナス変化の人数がプラス変化の人数を上回っており、インターンシップという実社会で起こり得る問題に自分ごととして対峙したことが、何らかの影響を与えたとも考えることができる。

表 2. 事前・事後で変化した能力数値の積算値（①学年別）



	3 つの能力			12 の能力要素											
	前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	創造力	計画力	発信力	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ストレス力
1 年生	-8	7	-13	-14	3	-12	8	12	2	-30	23	-25	-26	-3	-21
2 年生	9	-19	-1	-12	41	2	-54	18	-18	8	-57	36	5	30	-19
3 年生	164	113	169	186	161	132	37	102	255	164	203	218	89	183	138

表 3. 事前・事後で能力値が変化した人数の差（①学年別）

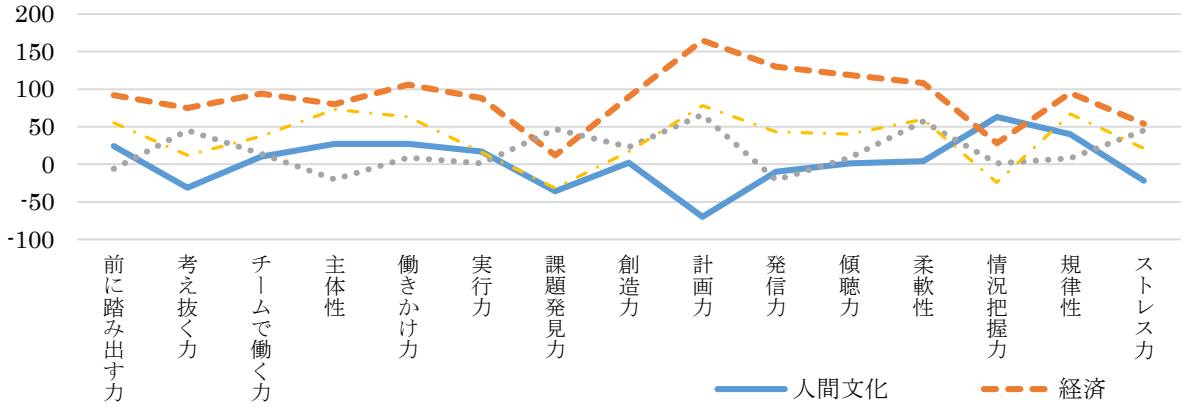
	3 つの能力			12 の能力要素											
	前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	創造力	計画力	発信力	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ストレス力
1 年生	-1	1	-3	-1	1	1	1	1	1	-3	2	-3	-3	-1	-1
2 年生	3	-2	1	-2	4	-2	-4	2	-1	2	-4	5	3	7	-1
3 年生	15	6	19	13	9	4	-8	17	15	7	23	21	2	18	16

これらの調査結果より、大学は参加学年ごとにインターンシップの参加目的を変えたり、異なる達成目標を設定・評価するような研修プログラムの開発をおこなうこと、そして企業も 1, 2 年生の受け入れ時には通常のプログラム運営と比べて経験不足を補うようなフォローやサポートが必要となることが改めて明らかになった。

4-2. ②学部別

学生の所属する 4 つの学部別に分類した診断結果の変化を整理したものが次のグラフ･表である（表 4, 5）。マイナスを表す項目数では、人間文化学部が最も多く（5 項目）、続いて工学部（3 項目）、生命工学部（2 項目）となっており、経済学部においては全ての項目がプラス変化という結果となった。経済学部と他 3 学部の値の差が特に大きい項目が「実行力」と「発信力」に見られることから、経済学部の学生が、失敗を恐れず行動したり、自分の意見を積極的に発言したりしたことによって、インターンシップ期間中のフィードバックを多く得ることができ、結果として社会人基礎力の能力数値が全体的に向上したと考察することもできる。項目別に見ると、人間文化学部では「情況把握力（63）、規律性（40）、主体性及び働きかけ力（27）」、経済学部「計画力（165）、発信力（130）、傾聴力（119）」、工学部「計画力（66）、柔軟性（57）、課題発見力（47）」、生命工学部「計画力（78）、主体性（73）、規律性（67）」が、各学部で特にプラスの変化があった項目として挙げられる。学部別の比較において興味深いのが「課題発見力」の項目である。工学部では特にプラスの変化があった項目の一つが「課題発見力」だが、他 3 学部においてはマイナス変化もしくは低成長の項目に入る。前述の経済学部の特徴と対照的に、「主体性」や「発信力」の項目がマイナス変化にも関わらず、「課題発見力」でプラスの変化が見られることは、学部の違いによって学生の課題に対する捉え方や視点に違いが生まれる可能性があることを示していると考えられる。しかし、今回の調査における工学部生の人数が 8 名と少なく、特定の学生のプラス変化に影響を受けた可能性も否定できないため、「課題発見力」の向上が工学部の学生全体に当てはまる特性として意味付けるには、より詳細な調査が必要である。

表 4. 事前・事後で変化した能力数値の積算値（②学部別）



	3 つの能力			12 の能力要素											
	前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	創造力	計画力	発信力	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ストレス力
人文	24	-31	10	27	27	17	-36	2	-70	-10	1	4	63	40	-22
経済	92	75	94	80	106	88	12	90	165	130	119	108	28	95	54
工	-6	45	14	-20	9	1	47	23	66	-21	9	57	1	8	45
生命	55	12	37	73	63	16	-32	17	78	43	40	60	-24	67	21

表 5. 事前・事後で能力値が変化した人数の差（②学部別）

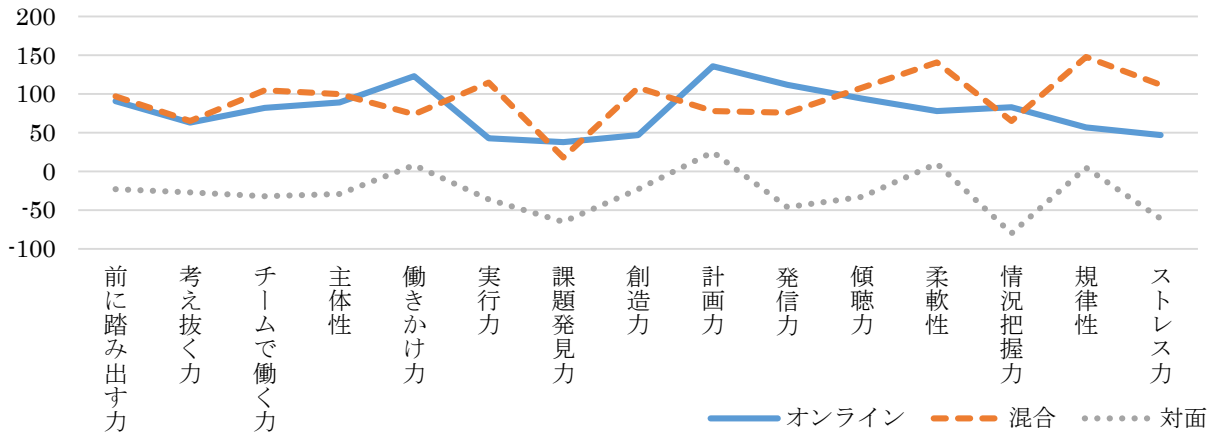
	3 つの能力			12 の能力要素											
	前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	創造力	計画力	発信力	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ストレス力
人文	6	-2	4	3	3	1	-5	0	-3	-1	3	1	2	8	1
経済	6	1	7	1	4	8	-1	12	7	8	10	10	3	9	4
工	1	5	3	0	1	-3	-1	4	6	-2	2	4	-1	-1	4
生命	4	1	3	6	6	-3	-4	4	5	1	6	8	-2	8	4

以上の調査結果より、大学及び企業は学生の所属学部による特性を考慮した研修や実習プログラムを開発する意義が明らかになった。具体的には、同じ学部のグループ編成で、その学部生が苦手とする社会人基礎力の向上を目指すワークを実施したり、お互いの学部生の苦手な力を補い合うグループ編成によって学び合いをおこなったりすること等が考えられる。

4-3. ③インターンシップ類型別

コロナ禍の影響を受け、新たなインターンシップのあり方として急激に増加したオンラインインターンシップ。2021 年度は感染状況の落ち着きもあり、オンライン型と対面型の利点をそれぞれ活かした混合型インターンシップが増加した。これら２つの新しいインターンシップと、従来の対面型インターンシップの３つの類型別で診断結果の変化を整理したのが次のグラフ・表である（表 6, 7）。興味深いのは、オンライン型と混合型のインターンシップにおいてマイナスを表す項目が一切なく、一方で対面型インターンシップにマイナス変化が集中する結果（15 項目中 11 項目）になったことである。社会人基礎力の「３つの能力」においても、積算値及び人数差の両方においてマイナス変化となっており、対面型インターンシップに参加した学生の多くが社会人基礎力のスコアを下げる結果となった。しかし、この調査結果から対面型インターンシップが社会人基礎力の成長に寄与しなかったと結びつけるのは早計である。捉え方を変えれば、対面型インターンシップは自分の未熟さに気付ける機会が数多くあり、以前よりも現実に則した厳しめの自己評価ができるようになっていると考えることもできる。本調査では社会人基礎力診断テストの結果のみを用いて考察をおこなったが、診断スコアの変化の要因を具体的に捉えるには、受入企業が提供している実習プログラムの違いを精査した上、インターンシップ体験を記述した報告書やレポートといった定性情報と合わせて考察し、マイナス変化の意味をより深掘ることが必要である。

表 6. 事前・事後で変化した能力数値の積算値（③インターンシップ類型別）



	3 つの能力			12 の能力要素											
	前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	創造力	計画力	発信力	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ストレス力
オン	91	63	82	89	123	43	38	47	136	112	94	78	83	57	47
混合	97	65	105	100	74	115	18	108	78	76	108	141	65	148	112
対面	-23	-27	-32	-29	8	-36	-65	-23	25	-46	-33	10	-80	5	-61

表 7. 事前・事後で能力値が変化した人数の差（③インターンシップ類型別）

	3 つの能力			12 の能力要素											
	前に踏み出す力	考え抜く力	チームで働く力	主体性	働きかけ力	実行力	課題発見力	創造力	計画力	発信力	傾聴力	柔軟性	情況把握力	規律性	ストレス力
オン	10	4	10	5	10	1	-1	9	8	6	13	5	4	9	7
混合	8	2	9	6	3	8	-3	11	3	3	8	15	4	12	8
対面	-1	-1	-2	-1	1	-6	-7	0	4	-3	0	3	-6	3	-2

インターンシップ前後でプラス変化が大きかったものを類型別に抽出すると、オンライン型では「計画力（136）、働きかけ力（123）、発信力（112）」、混合型「規律性（148）、柔軟性（141）、実行力（115）」、対面型「計画力（25）、柔軟性（10）、働きかけ力（8）」のような結果となった。オンラインでのコミュニケーションは画面枠内に限定されるため、自身の気持ちや考えを他者に察してもらうことが難しい。対面型インターンシップ以上に意識を持って、自分の考えをわかりやすく伝え、他者に働きかけることが求められることが「働きかけ力」「発信力」の向上につながったと考えられる。また、混合型で特に数値の向上が見られた「規律性」と「柔軟性」については、全くタイプの異なる２つの実習の予定と目的を理解して取り組むことが参加学生に求められるため、他２つのインターンシップ以上にプログラムに則した行動と多様な考えを理解する力が養われたと考えることができる。

今回の調査結果より、学生が取り組むインターンシップの種類に応じて、向上する社会人基礎力の能力要素に違いが生じることが明らかになった。このことは、インターンシップに参加を希望する学生の参加目的や向上したい能力に応じて、適切な種類のインターンシップを提案するコーディネート能力が大学に求められることにつながる。また、企業に対しては学生の成長ニーズに合ったプログラム改善のヒントとなり、参加満足度と企業イメージの向上につながると考えられる。

5. まとめと今後の課題

本研究では、福山大学が推進する「BINGO OPEN インターンシップ」の今後のあり方を模索するための基盤となる情報整理を目的に、社会人基礎力診断テストのスコアの変化から３つの軸（①学年、②学部、③インターンシップ類型）で比較・考察をおこなった。その結果、３つの軸のそれぞれにおいて、大学及び企業が今後取り組むべきインターンシップの課題や切り口を導き出すことができた。特に、インターンシップ類型別の数値比較において、オンラインを活用したプログラムと対面型との間に大きな違いが見られたことは、本研究の目的に合致する貴重な情報となった。しかし、本調査では社会人基礎力診断テストの結果のみを基に考察をおこなったことから、変化の要因や影響を特定するまでには至っていない。また、本調査における対象者数が 71 名と少なく、分類軸によってはグループの人数に偏りも生じているため、データが示す信憑性という点でも課題が残る。本研究の目的である、学生の成長につながる要因を特定し、更なる改善につなげるためにも、調査対象者数を増やし、

バイアスを取り除く必要がある。コロナ禍をきっかけに新卒採用の時期や方法も多様化しており、大学が推進するインターンシップのあり方については、大学が求める教育的意義に加え、社会情勢や受入企業の意向、学生の多様な参加ニーズも考慮した改善策が求められる。本研究における考察結果を基に、社会人基礎力向上の観点から参加学生と受入企業の最適なマッチングのあり方について引き続き検討をおこない、BINGO OPEN インターンシップの更なる改善・充実を目指したい。

※ 株式会社ジェイ・オー・アイの社会人基礎力診断テストの受診、及び学生データの提供にあたり、2020 年度の導入時に福山大学との間で協働事業契約を締結している。

【注】

1) 文部科学省（2012）「島根大学（中国四国）産業界等との連携による中国・四国地域人材育成事業」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/12/26/1329271_7.pdf（2021.12.20 閲覧）

2) 初見康行、坂爪洋美、梅崎修（2021）「多様なインターンシップ経験と効果の一考察」日本労働研究雑誌 63（8）, pp. 41-57

3) 河村諒、治部哲也、松村歌子、長見まき子、山内彰（2021）「インターンシップの教育効果の検討～社会人基礎力とインターンシップ参加の効果から」関西福祉科学大学 EAP 研究所紀要第 15 号, pp 43-49

4) 岡本隆、園田雅江、曽我亘由、深掘秀史、毡康介（2020）「インターンシップが社会人基礎力自己評価へ与える影響」Journal of Ehime Management Society vol.3, pp 1-8

5) 経済産業省（2018）「人生 100 年時代の社会人基礎力について」https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/sansei/jinzairyoku/jinzaizou_wg/pdf/007_06_00.pdf（2021.12.20 閲覧）